

〈メキシコのなるもの〉の視覚化とその背後

落 合 一 泰

1 はじめに一文化的自画像と集合的記憶

近代国家においては、「私たちはこのような点で他国民に抜きんでた伝統をもつ」という文化的アイデンティティの確立が重要な課題になってきた。「私たちはいったい誰なのか」「私たちらしさとは何なのか」「私たちは何を過去から受け取り、何を未来に伝えていくのか」。このような思いから発する複合的な〈われわれ探し〉を、ここでは〈文化的自画像〉の模索と呼びたい(落合 1993, 1996)。もちろん、近代以前の社会でも〈文化的自画像〉は求められていたことだろう。ただ、文化的多様性を内包する世俗的な近代国家の誕生とともに、国民を単位とする〈文化的自画像〉が、それまで以上に意識的に追求されるようになった。そこに生み出された〈私たちらしさ〉とは、昔からその国民に備わっていた資質とは言い切れない。むしろ、それは時代時代の国家指導層が政治的状況にそくして国民に提示し、国民も受け入れてきたイメージであることのほうが多い(ホブズボウム他編 1992)。

本稿では、歴史状況のなかで外部との関係性において自己に投影するイメージ、すなわち〈文化的自画像〉について、近代国家メキシコを例に考察したい。分析対象とするのは、町の風景のなかで特定のメッセージを発散している公共建築やモニュメント、そして博物館における展示である。それらは、為政者が国民に刻み込みたい国家の記憶を視覚化したものと言えるだろう。時の為政者による歴史解釈の産物である以上、それは時代によって壊されたり作りかえられたりもする。しかし長い年月にわたり生活空間のなかにおか

れた結果、不可侵の真実とみなされ国民の現実の見方や未来の予測を縛るようになることもある。

モニュメントなどを通じ国民が共有することを期待される神話や記憶を、ここではアナル派の〈心性の歴史学〉の先駆者ともいべき宗教社会学者モーリス・アルヴァックス（1989）にならい、〈集合的記憶〉と呼びたい（落合 1990）。ある国民や民族の歴史意識、文化的課題を理解するには、その社会における〈集合的記憶〉とそれに基づき提示される〈文化的自画像〉を知ることが大切であろう。本稿の目的は、〈メキシコの現在〉を知るために、この国の〈集合的記憶〉や〈文化的自画像〉を考えることにある¹⁾。

2 メキシコシティの旧市街—征服から独立へ

16世紀はじめ、メキシコ地方では、太陽を最高神とする軍事国家アステカが周辺諸民族を支配していた。その首都テノチティランは人口25万とも言われ、当時世界最大級の都市だった（Meyer & Sherman 1995: 87）。1519年にこの地を訪れたスペイン人征服者エルナン・コルテスは、この湖上都市の繁栄ぶりを神聖ローマ皇帝カール5世に驚きをもって報告している（サアグンほか 1980: 172-213）。スペイン軍はこのアステカ国家を2年の歳月をかけて征服し、メキシコ地方は1521年から約300年にわたり、スペイン支配下に置かれることになった。湖沼干拓という大事業を軸にテノチティランがスペイン風の都市メキシコシティ Ciudad de México に姿を変えていったのは、この植民地時代のことだった。

標高2240メートルのこのメキシコシティは、現在周囲も含めると人口が2000万を超える大都市に成長し、なお膨張を続けている。だが、1821年のメキシコ独立とともに新国家の首都になったこの新大陸最大の都市も、当時の人口は約15万5000にすぎなかった（Meyer & Sherman 1995: 305）。今日、「歴史的都心」（Centro Histórico）と名付けられ、〈下町〉の響きをもつ〈セントロ〉（Centro）の名で日常的には呼ばれている地区とその周辺だが、当時の市域であった。その外部には森林と荒野が広がり、湖沼も残っ

ていた。本稿では、当時メキシコシティが占めていた空間を〈旧市街〉と呼ぶことにする。

この旧市街の中央に位置するのが、大広場ソカロ Zócalo である (図 1)。市民が行きかい政治集会もしばしば開かれるソカロの中央には、巨大な国旗が高々と掲げられている。毎年、独立記念日前夜の 9 月 15 日夜半、大統領は国立宮殿のバルコニーから「メキシコ万歳!」の雄叫びを上げ、それに唱和する群衆で埋まったソカロー帯は愛国心のるつぽと化す。翌 16 日の独立記念日には軍隊や歴史行列がこのソカロを出発し、市内大通りを行進する。

このソカロを取りまくのは、完成に 240 年を要した大聖堂、大統領執務室のある国立宮殿、この大都市を統括する連邦区庁など、植民地時代の建築の数々である。アステカ時代、この大広場一帯には首都テノチティトランの神域があった。その主神殿テンプロ・マヨール Templo Mayor は、現在の大聖堂と国立宮殿にはさまれたあたりにあったが、征服後に壊され地中に埋められた。テンプロ・マヨール遺跡は 1970 年代後半から発掘と修復が進み、今では隣接の博物館とともにメキシコシティ一番の観光スポットになっている。このように、大広場ソカロを中心とする旧市街は、今も植民地時代やアステカ時代の空気が濃密に流れる空間である。

植民地時代のメキシコでは、スペインに対する劣等意識や被差別感が強かったと言われる。スペインから派遣された役人が権力を握り、先住民インディオ indios や混血メスティーソ mestizos ばかりでなく、クリオーリョ criollos と呼ばれたメキシコ生まれのスペイン人なども本国人から差別されていた。そうしたメキシコで独立運動が起きたのは 1810 年のことである。最初に立ち上がったのは、植民地政策に苦しんでいた先住民や小農民であった。その指導者は、今では国父として尊敬されているミゲル・イダルゴ神父だった。当初、クリオーリョたちはそれを弾圧する側に立った。しかし、スペイン本国がナポレオン・ボナパルトに侵入され弱体化したことから、彼らは既得権の確保を目的に独立派となり、1821 年に独立が達成された。たしかに植民地時代末期には、スペイン本国から遠く離れた新大陸において約 3 世紀

にわたり文化を育くんできたクリオーリョ層に、歴史意識の点で本国から一線を画そうとする文化ナショナリズムが生まれてはいた(Tenenbaum 1994:133-134). しかし、メキシコ独立それ自体は、そうした文化ナショナリズムの政治運動化というより、国際政治の状況変化の結果だった。

独立して4年後の1825年、動植物、鉱物など国内の自然資源の調査収集を主目的とする国立博物館が大学の一角に設置され、しだいにスペイン人到来以前の文化遺産も〈国家的栄光〉の証左として收藏されるようになっていった(Morales-Moreno 1994:178). そして1850年ころ、新国家の文化的独自性の原点を征服以前のメキシコに見いだそうとする文化運動が始まった(Keen 1990:41). たとえば造形芸術の分野では、彫刻家マヌエル・ピラルが征服者コルテスが出会ったアステカ皇帝モクテスマ2世の彫塑を1851年に制作している。ピラルは、アステカの隣国トラスカラに実在したヘラクレス的英雄トラウィコレ、コルテスに協力を惜しまなかった先住民女性マリンチェなど歴史上の人物の彫塑も同時期に制作している(Ramírez n. d.:4). しかし、主題と衣装を別にすれば、そこに見られるのはヨーロッパ起源の新古典主義的な表現様式でしかない。古代メキシコをテーマにしたことは新奇ではあったが、この時期の文化運動は、やはりヨーロッパを基準とした古代的関心の枠から出ていなかった。

このような古代趣味から一步踏み出したのが、ハプスブルク家出身のマクシミリアン大公だった。アメリカ大陸に進出する機会をうかがっていたフランスのナポレオン3世は、1862年からメキシコの内政に干渉し始め、その一環としてメキシコ自由主義派の反対を押し切り、1864年にマクシミリアンをメキシコ皇帝として送り込んだ(Meyer & Sherman 1995:385-395; cf. Bazant 1991). マクシミリアンは、学術に造詣が深く、エキゾチックな事物や考古学や芸術を愛する、いささか空想的な啓蒙君主だったと言われる。マクシミリアンはまず、ヨーロッパ人がギリシア・ローマを文化的故郷としていたように、征服以前の文明を新国家メキシコの文化的基盤として再評価しようとした。彼はオーストリアのハプスブルク・コレクションからアステ

カ時代の貴重な羽毛製の盾をメキシコに持ち帰り、自分が治めることになった国家に寄贈してもいる (cf. Feest 1985: 237-238).

それまで大学内にあった国立博物館は、実質的には机上の組織にすぎなかった。そこで皇帝マクシミリアンは、1866年に新しい国立博物館を設立し、植民地時代のスペイン文化とともに古代先住民文明の遺産の保管を始めた。この博物館は、1964年まで約100年間存続した。メキシコ考古学がアメリカ大陸固有の歴史学として研究されるようになったのも、マクシミリアン時代のことである。彼は当代一流の考古学者、地理学者、歴史学者、動物学者を集め、フランス人研究者と一緒にメキシコ学を推進させた (Schávelzon 1994: 325-327).

マクシミリアンは帝国支配の強化に努めるいっぽう、先住民の生活を啓蒙思想家の手で改善したいと願うロマン主義者でもあった。マクシミリアンは、先住民の共有地を大土地所有者から保護する政策を次々と打ち出した。彼は、先住民の子供を養子に迎えてもいる。 (*ibid.*: 330). マクシミリアンのこのような政策は、古めかしい王権中心主義のようにも見え、近代ヨーロッパにならないブルジョワによる近代化を進めようとしていた自由主義派から強い反発を受けた。ヨーロッパの政情変化にともない、フランス軍は1967年にメキシコから撤退する。後ろ盾を失ったマクシミリアンはベニート・ホアレス大統領率いる自由主義派の反撃に耐えられず、亡命を拒絶したまま逮捕され銃殺されてしまった。享年35歳、わずか3年の治世であった (Meyer & Sherman 1995: 395-401).

3 レフォルマ大通りの近代主義—ディアス時代の都市改造

マクシミリアン帝政が倒れた1867年、パリでは万国博覧会が開かれ、メキシコは古代ピラミッドを模したパビリオンを出展した (吉田編 1985: 75). メキシコは、対外的にも古代文明を国家シンボルとして利用し始めたのである。この時代、先住民をテーマとするアカデミズム画家も出現した。西洋の規範にしたがうアカデミズム絵画では、当初、地元の主題が取り上げられる

ことはなかった。しかし、ホセ・オブレゴンが先スペイン期の歴史に題材を得て油絵『ブルケの発見』を1869年に発表してからは、技法的にはアカデミズムに依拠しながらも、画題は自国の伝統に求めようとする芸術家が増えていった。この絵は、古代トルテカ王国において、美しい娘がリュウゼツランから醸したブルケ酒を王に差し出すという神話的情景を描いたものである(Ramírez 1985: 75)。

古代アステカ文明のイメージに新たな意味を与え、国家目的に最大限に利用したのは、1877年から1911年まで途中4年間を除き大統領として長く君臨した自由主義者ポルフィリオ・ディアスであった。ディアスは1885年に巨大なアステカ彫刻『太陽の石』を大聖堂脇から国立博物館に移設し、正面奥の部屋の中央という国家シンボルたるにふさわしい特別な場所に展示した(Fernández 1990: 227)²⁾。ディアスは遺跡発掘にも積極的であり(Morales-Moreno 1994: 179)、アステカの最後の戦士皇帝クワウテモクの勇気を称えるモニュメントを各地に建立した(Escobedo, ed., 1992: 64)。フランス革命百周年を記念した1889年のパリ万博には、アステカ戦士のブロンズ・パネルを並べ、考古学的デザインをちりばめたパビリオンを出展している(Ramírez 1988; Tenorio Trillo 1996b: 64-113)。アステカの偉大な都テノチティトラン建設をテーマにした絵画コンクールを開催したのは、1892年のことだった(Ramírez 1985: 75)。ディアスは国内遊説においても古代文明のイメージを利用し、たとえば1906年のユカタン地方遊説では、古代マヤ文明の建築意匠を満載した仮設の凱旋門を各地でくぐっている(Schávelzon 1988: 247; Siller 1987: 52)。1880年代後半に出版された『幾世紀ものメキシコ』(Chavero 1886)という歴史書の口絵でも、スペイン的要素はわずかしかが見られず、全体として古代先住民文明の偉大さが強調されている。このようにディアス時代には、スペイン中心主義を脱却し、古代メキシコ文明を国民意識の中核に据えようとする歴史観が力をもった。この歴史意識は、一般に〈新アステカ主義〉と呼ばれる³⁾。

先住民文明をよりどころにしたとはいえ、この〈新アステカ主義〉が古代

先住民文化の肯定と現代先住民文化の否定という二重基準からなっていたことには注意すべきであろう。ディアスは、自由主義経済を打ち出し資本主義的な適者生存の競争原理を導入してメキシコ経済を繁栄に導こうとしていた。そのディアスにとり、古代文明はメキシコを近代国家に脱皮させるナショナリズムの源泉として、またナショナリズムの枠内においてのみ称賛に値したのである。ディアスが必要としたのは近代的な国民であり、進歩発展の〈阻害要因〉と見なされていた先住民ではなかった。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、メキシコでは先住民反乱が頻発する。それは、少数の資本家や大農園経営者の成功の陰で、階層差が拡大していたことに起因する。1900年の風刺漫画には、暴政という名の石の上で政治家に心臓をくりぬかれていく先住民と、その心臓を捧げられる〈アステカ神〉ディアスを描いたものもあった(Ramírez 1985:122; 落合 1998:217)。

1910年、ディアス体制に苦しむ小農民や先住民が立ち上がり、メキシコ革命が勃発した。この運動には、ディアスの経済運営に異議を唱え始めていた新興中産階級も別の利害から加わった。メキシコ史では、1910年という年号はこの〈革命〉と分かちがたく結びついている。しかし、この年が1810年の独立運動開始からちょうど100年目に当たっていたことも忘れられてはならない。1910年には百周年 Centenario を記念するさまざまな行事がとり行われた。首都改造の計画も進み、この時期メキシコシティは大きくその姿を変えていったのである。

百周年にむけ国家が企画した数多くの式典や行事に共通していた理念を一言で表現すれば、それは欧米に対する劣等感を払拭し国際社会の一員としての地歩を築くにいたった〈近代国家メキシコ〉を内外に誇示したいという意欲であった。〈前近代的〉とされた先住民の姿の見えないコスモポリタンな〈理想都市〉メキシコシティ。そこでは、新アステカ主義を誇り科学的精神にも富んだ中産階級が近代的な生活を楽しんでいる。このような新興国民国家メキシコの〈文化的自画像〉の提示に、記念行事のすべてが収斂していたのである。この百周年記念祭こそ、〈秩序と進歩〉Orden y Progreso を国是

に近代主義的發展, 国民国家形成, 国際性の獲得をめざしていたディアス体制34年の総決算だったと言えるだろう。

メキシコでは, 例年9月15日から16日にかけて独立記念日関連の諸行事が華やかにとり行われる。1910年の場合は特別で, 9月前半だけでも近代的公共施設やモニュメントが多数落成したばかりでなく, 新しい官公庁舎や国立機関の開設式典や街路の名称変更などが連日のように催された。そして, 独立記念日当日の9月16日にはレフォルマ大通り Paseo de la Reforma に独立記念塔が完成し, 月末には19世紀なかばの改革者でフランス干渉を打ち破ったホアレス大統領をたたえる記念座像の除幕式も, 旧市街はずれのアラメダ公園でとり行われた(Tenorio Trillo 1996a:77-78)(図1)。

〈改革〉とは, カリフォルニア, アリゾナ, テキサス, ネヴァダ, コロラド, ニューメキシコなど, 当時のメキシコ国土の約半分を失った対アメリカ合衆国戦(米墨戦争, 1946-48)敗戦から立ち直り, 革新派が国家とカトリック教会の分離を明文化した憲法(1857)や改革法(1859)を發布し, 国家の基本制度が確立された19世紀なかばの近代化推進の時代のことである(Meyer & Sherman 1995:373-384)。〈第2の独立〉とも呼ばれるこの大改革を実現したホアレス大統領の顕賞は, ディアス政権の近代化推進政策の正当化に直結するものだったと思われる。

独立や改革に関連したモニュメントと同時に, 近代科学の勝利を象徴する諸施設が百周年に合わせて落成していったことも注目に値する。ディアス大統領臨席のもと, 欧米の外交団や著名大学代表者を招いてコスモポリタンな学術研究を目指すメキシコ国立大学が創設されたのも, 9月22日のことだった(齊藤1994)。1910年9月, このようにエリート層は, 集団沸騰状態と呼べるほどに自国の近代化に酔っていたのである。当時, 〈近代化〉とは何を意味していたのであろうか。第1に, それは進歩, 科学, 調和的かつ平和的な経済發展を指していた。そして近代都市こそ, それを具体化してみせる空間だった。理想的な都市とは, 経済發展のみならず, 文化的偉大さ, 衛生, 快適さ, 美しさ, 国家の由緒正しさを示す舞台と考えられていた。第2

に、〈近代化〉は、一体感のある国民国家の確立と不可分だった。モニュメントや公共空間を巧みに配置した首都は、ナショナリズムを強く感じさせる場所になるべきだった。第3に、〈近代化〉はコスモポリタンな生活スタイルを実現することを意味した。そのため、メキシコシティは〈アメリカ大陸のパリ〉たることをめざし、〈花の都〉の文化を模倣しようと努めたのである (Tenorio Trillo 1996a: 79)。

このような〈近代〉理念を視覚化する大がかりな装置が、万国博覧会だった。アメリカ合衆国独立百周年の1876年にはフィラデルフィアで、フランス革命百周年の1889年にはパリで万博が開催されていたことから、メキシコでも独立運動百周年の1910年に万博を誘致しようという動きが、早くも1880年代には始まっていた。そして、万博をホストするメキシコシティの都市改造、衛生改革、ナショナリズムなどが練り上げられていったのである。万博開催はエリート層の経済的関心にも合致するものとされ、先住民の教育や近代化にも役立つと言われた。この万博招致計画は、実現直前に頓挫してしまう。しかし、世界中から外交団を迎えた百周年祭に際しては、ドイツ製の〈水晶宮〉が常設展示場としてメキシコシティに建設されてもいた (*ibid.*: 81; Fernández 1987: 151-156)。鉄とガラスでできた〈水晶宮〉とは、1851年のロンドン万博に初登場したそれまでにないタイプの建築物で、レンガや石積からなる重々しい建物とはまったく異なった軽やかな近代的技術の結晶であった。その後の公共建築に大きな影響を与えたこの〈水晶宮〉を60年後の万博用に欲したところに、メキシコの〈進歩と近代化〉への意欲を感じることができる。

百周年記念の都市改造において注目すべきは、新規のプロジェクトの多くが、アステカ時代や植民地時代の面影を残す旧市街から西にはずれたレフォルマ大通り沿いで展開していった点である。この大通りは、植民地時代末期に建てられたチャプルテペック城から市内にいたる道路としてマクシミリアン皇帝が立案したものだったが、建設が本格化したのは皇帝の死後の1870年代である (Tenenbaum 1994: 129-130)。人口が30万に達し、メキシコ

シティが旧市街からあふれつつあったこの時代、西郊のこの大通りを完成させ周囲に〈理想都市〉新設が計画され始めたのである。この〈理想都市〉建設は、ジョルジュ＝ユジューヌ・オスマンのパリ市街改造や英米の田園都市ガーデンシティ計画など、19世紀ヨーロッパの近代都市計画から想を得たものだった。そのプランは1880年代から一部の地域では実行に移され、電化、道路舗装、公園造設、鉄とガラスのパサージュ建設などが進められていった。こうして、新興有産階級のための新開地区が、首都の西側につぎつぎに造成分譲されていったのである (Tenorio Trillo 1996a: 82-85)。

現在は延長されているが、当時は旧市街から伸びるホアレス通の終点がレフォルマ大通りの起点になっていた。レフォルマ大通りは、そこから大統領官邸があったチャブルテペック城の足下まで、約3キロメートルにわたり真っすぐ伸びていた。途中には、パリのシャンゼリゼを特徴づける星状の道路交差エトワールをまねたロータリー *glorietas* が6ヵ所設けられ、メキシコの歴史の諸段階を象徴するモニュメントが4基置かれた (図1)。

旧市街側から見た最初のロータリーは、ホアレス通とレフォルマ大通りの交差点である。そこには、独立時のスペイン国王カルロス4世の巨大な騎馬像が置かれていた (Tovar de Teresa 1992: I: 127-129)。レフォルマ大通りには、シャンゼリゼを模倣して両側に公園のように緑豊かな広い遊歩道が作られた。カルロス4世騎馬像の左右の遊歩道には、緑青におおわれ〈緑のインディオ〉と俗称された一対のアステカ王のブロンズ像が、門番役として1891年に置かれた (Escobedo, ed. 1992: 118)。2番目のロータリーにコロンプス立像が落成したのは、それより早く1877年であった (Tenenbaum 1994: 131)。つづく3番目のロータリーには、スペイン征服軍と最後まで勇敢に戦い、ついに捕らえられて死んだ最後のアステカ皇帝クワウテモクの像が1887年に完成している (*ibid.*: 131)。そして、独立宣言百周年記念日にあたる1910年9月16日、空白のロータリーをひとつ越えた5番目のロータリーに落成したのが、レフォルマ大通り最大のモニュメント、高さ36メートルの独立記念塔である (*ibid.*: 147)。

この塔の頂上には月桂冠をかかげた金色の天使が立つ。その下方には、イダルゴ神父をはじめとする独立運動の英雄たちが白い大理石に彫刻されている。この塔には今も多くの市民が敬意と感謝を込めた花輪を捧げに訪れ、外国使節団の表敬行事もしばしばここで行われる。このモニュメントを過ぎると、レフォルマ大通りは6番目のロータリーを越えたあたりで軽く右にカーブをとり、ディアス時代に大統領官邸となったチャブルテペック城の丘の北側を迂回し、森のなかに消えていく⁴⁾。

このレフォルマ大通りを岩山の上のチャブルテペック城のテラスから逆に眺め下ろしてみよう。すると、眼下には植民地時代、アステカ時代、アメリカ大陸「発見」、独立を象徴するモニュメントが一直線に並んでいたことが分かる。高層ビルのなかったディアス時代末期には、建設中だった国会議事堂（現革命記念塔）やオペラハウス（現芸術宮殿）までも一望に収めることができたことだろう。それは、チャブルテペック城の〈城主〉とも言うべきディアス大統領が国家史を〈清書〉し、視覚化してみせた空間だった。この大通りは、この〈公式の過去〉を国民の〈集合的記憶化〉する仕掛けに満ちていたのである。力のある者がすべてを一望に収めるこのパノプティコン様式は、エトワール広場の凱旋門からコンコルド広場にいたるフランス近代史の記憶空間を貫き、さらにルイ王朝を象徴するルーヴル宮まで見通す一直線のシャンゼリゼ大通りを開いたオスマンのパリ改造から学んだものであろう (Tenenbaum 1994: 130; Tenorio Trillo 1996a: 83)。

大聖堂や国立宮殿が面する旧市街の大広場ソカロは、依然として政治の象徴的中心であった。しかし、20世紀初頭のメキシコシティでは、新興エリート層の活動の中心として、また進歩に向かう国家のシンボルとして、レフォルマ大通りとその周辺が重要な意味を担うようになっていた。この新たな〈文化的自画像〉の構築のきっかけとなったのが、独立運動百周年祭だった。だが、祭が終わってわずか1カ月後にはメキシコ革命が勃発する。メキシコシティには、排除されていた先住民や農民が、革命兵士として大挙してなだれ込んでくることになるのである。

しかし、革命が起きたとはいえ、近代主義、ナショナリズム、国際主義、都市開発主義などディアスが掲げていた国家理念はそのまま新政府に引き継がれ、今日にいたっている。その意味で1910年のメキシコシティは、その後のメキシコが歩むことになる道をすでに示していたと言えるだろう。それは、米墨戦争で戦死した士官学校生を称える少年英雄記念碑が1947年にチャプルテペック城の真下、6つのロータリーの延長線上に建立されたこと、また次節に見るように、〈清書〉されたメキシコ先住民文明の展示空間として、1964年に新国立人類学博物館がチャプルテペックの森のレフォルマ大通り沿いに開館したことなどが示しているのである。

4 国立人類学博物館のナショナリズム—先住民文化の過去と現在

革命後のメキシコでは、インディヘニスモ Indigenismo (先住民主義) が新たな〈文化的自画像〉の中心理念になった。この思想は、過去から現在にいたる先住民文明を国家の基盤とみなし、その血を受け継ぐ混血メスティーソであることを誇りとしようという考えである。1948年、大統領府直属の組織として国立先住民庁が発足し、孤立的・後進的とみなされていた先住民諸民族の文化的混血化と近代国家メキシコへの統合に向けた諸政策が強力に推進されていった。このインディヘニスモは、西欧近代中心主義的な啓蒙主義的歴史観にもとづき、〈前近代社会〉を明るい近代に〈善導〉しようという意図をもつものだった。

先住民主義とはいえ、政策決定と実践の過程では先住民自身はあくまでも社会改革の対象であり、主体ではなかった。16世紀以来抑圧され続けてきた先住民に精神的堡壘の確立の必要性をみた点において、インディヘニスモが一定の意義をもっていたことは事実である。しかし、そこには古代文明を称賛し国家思想に取り込むいっぽうで、現代先住民文化は孤立的・後進的として否定するという、ディアス時代から受け継がれてきた姿勢があった。それは先住民側から見れば、統合されるか排除されるかという、自分たちの自主性を否定する政策でしかなかった。

さて、マクシミリアン皇帝が基礎を作りディアス大統領が新アステカ主義の拠点とした国立博物館は、革命後、国内の人類学的・考古学的調査研究とその展示・発表を主目的とする国立人類学博物館として再出発した。1939年、博物館は新設の国立人類学歴史学研究所の管轄下に入った。国立先住民庁が先住民の社会的統合を旗印に農地問題、経済振興、社会改革などに関わったのに対し、国立人類学歴史学研究所は科学的研究のスタンスを守り、いわゆる先住民問題からは距離を置いた。

メキシコシティの人口は、1930年には100万を超えた(Bataillon & Rivière D'Arc 1973:20)。この時期までに首都西部の開発はさらに進み、チャプルテペックの森のさらに西に、今日も高級住宅地とされる地区が開発・分譲されていた。そして1964年、近代開発と新しい生活スタイルを象徴する首都西部のチャプルテペック公園内に、それまでの旧市街中心部の人類学博物館に代わる新たな国立人類学博物館が開館した。だが、新旧博物館を比較すれば、その空間移動が展示の背後の歴史哲学の変化を意味しているのではないことが分かる。むしろ、新博物館は旧博物館の思想の強化を目指しているとさえ言えるだろう。新アステカ主義のもと、旧博物館はナショナリズム教育の場とされていたが、新博物館においても、アステカ文明の遺産には国民アイデンティティのシンボルとして特別な意味が与えられている。その〈文化的偉大さ〉や芸術性は、斬新な展示技術でいっそう強調されている。メキシコ文化ナショナリズムの顔ともいえるこの博物館には年間300万人もの入館者があり、小学生の団体や歴史の宿題を抱えた中学生も毎日大勢訪れている。

この新しい人類学博物館のアステカ展示は、広い中庭を越えた入り口の真向かいに位置する、ひときわ天井の高い建物にある。この博物館では、薄暗闇のなかに置かれた遺物にスポットライトを当てるという近代的な展示方法がとられている。この展示法は、アステカ文明の古さやエキゾチズムを強調し、高い芸術性や精神性などの意味性を遺物に与える効果をもっている。

この展示室の中央奥、やや高い場所に置かれているのが『太陽の石』であ

る。周囲にほかの陳列品はない。前のベンチに座れば、この特別な1点だけを見つめることができる。メキシコの人類学者ギジェルモ・ボンフィル＝バタジャは、この博物館を教会の礼拝堂になぞらえ、アステカ展示室は聖人像がひしめきあう祭壇であり、『太陽の石』はその中央に安置されたキリスト像のようであると言う(Bonfil Batalla 1990:90-91)。たしかに教会と博物館は宗教的ないし世俗的な権力性を誇示する空間であり、構造上よく似た空間構成をとる場合があるようにも思われる。

この博物館では、1階の考古学展示には多数の来観者があるのに、2階の現代先住民文化の展示を見に上ってくる人は決して多くない。これは階段の機能性が低いという構造上の問題のためとも言える。だが、上下ふたつのフロアが切り離されて感じられるのは、両フロアの歴史関係がほとんど説明されていないという事実と無関係ではないと思われる(cf. García Canclini 1989:174-177; Shelton 1995:93-94)。征服や植民地時代の経験、独立後の先住民生活の変化、革命後のインディヘニズムの影響などについては、ほとんど解説がない。たとえば、先コロンブス時代の宗教とスペイン人が導入したキリスト教の融合から独自に発展した現代ユカタン・マヤ人の雨乞い儀礼は、精巧な縮尺模型で示されているだけである。現代マヤ系先住民の生活のありさまにしても、民族衣装を着た男女のマネキンが生活用具とともに民族ごとに展示されているにすぎない。

そこには、歴史的・社会的な変化への視点が欠けているように思われる。この凍てついた民族誌展示が浮き彫りにしているのは、マヤ地方には、かつては1階に見るような偉大な文化が栄えていた、孤立した生活をいとなむ今日の先住民たちもそのエキゾチックな要素を伝えている、そして、これからもそうであろう、という博物館側の言説である。そこには考古学の時代から植民地時代を経て現在にいたる歴史過程の考察がなく、先住民自身の声も聞こえてこない。感じられるのは、展示する側と展示される側のへだたりである。国立人類学博物館の展示では、先住民文化の過去と現在にこのような〈編集〉の手が加えられている。社会的強者中心のナショナリズムから発想

されているこの博物館の先住民文化の〈編集〉の仕方は、レフォルマ大通りにおける国家史の〈清書〉と同じ構造をもっていると言えるだろう。

5 おわりに―〈メキシコのなるもの〉をめぐる新たな問い

メキシコシティ旧市街には、アステカ時代の遺構が数多く眠っている。地下鉄1号線と2号線が交差するピノ・スアレス駅構内には地下鉄建設のさいに出土した小神殿があり、乗り換え客の通路はそれをぐりと巡るように作られている。かつて大聖堂脇に立て掛けられていた『太陽の石』を市民が日常的に眺めることができたように、今日の地下鉄利用者は、この小神殿を毎日目にすることができるのである。すでに述べたように、すぐ近くのテンプロ・マヨール遺跡は市内一番の観光地になっている。

大広場ソカロの近くには、アステカをたたえる現代のモニュメントも少ない。たとえば、首都となるべき場所を見いだしたアステカの父祖たちを刻んだモニュメントが、1970年に建てられている(図1の「テノチティラン創建記念碑」)。その背後にあるのは、アステカの偉大な精神が現代メキシコ人にも受け継がれているという主張であろう。また、図1の範囲からは外れているが、メキシコシティの空港近くには、アステカ戦士とスペイン兵士のあいだから混血女性が立ち上がる『混血性に捧ぐ』というモニュメントもある。1978年に建てられたこのモニュメントは、両文明の融合から生まれたメスティソ文化を称えたものである。その下方では、スペイン人とインディオの握りあうふたつの手が大きく浮き彫りになっている。

これら古代先住民文化の誇示や混血性の積極的評価などに、現代メキシコの〈文化的自画像〉を見ることができる。しかし、そうした〈文化的自画像〉は指導層が作り上げたイメージであり、実際の先住民たちの生活からはかけ離れたものである。それは、先住民主義の名のもとに、実際には先住民自身の声をかき消す作用をしてきたと言えるだろう。

1994年1月1日、メキシコ南部チアパス州で先住民や小農民を中心とするサパティスタ国民解放軍 Ejército Zapatista de Liberación Nacional が

蜂起した。彼らが非難するのは、このような〈文化的自画像〉を掲げた政治運営や文化政策がこれまで植民地主義的状况を再生産し続け、インディヘニスマの主張とは裏腹に、先住民の多くを国内棄民状態に追いやってきたという点にある。カナダ、アメリカ合衆国、メキシコは1994年に北米自由貿易協定 NAFTA を発効させ、域内の貿易自由化を打ち上げた。サパティスタは弱者切り捨て策としてこの協定に反対し、先住民や小農民共同体の自治権・自主決定権・自主統治権を要求している(落合1997)。このような運動は、独立以来メキシコの〈文化的自画像〉の根底を流れてきた近代主義的な歴史哲学に疑念が呈され、別の道が模索されている現状を示している。北米自由貿易協定は、地球化時代の新自由主義の象徴である。それとサパティスタの軋轢は、単なる〈近代と伝統の対立〉ではない。そこには、メキシコの〈文化的自画像〉とそれを支える歴史哲学の再検討という重要な問題が隠されている。

歴史上メキシコには、社会的強者としての欧米系文化と社会的弱者としての先住民文化が存在してきた。両者はこれまで、近代主義的な諸政策で切り貼りされてきた。これら欧米系文化と先住民文化をどう関係づけるか。そこに、この国の〈文化的自画像〉の根源的課題があると言えるだろう。独立後のメキシコ文化史を振り返ると、そこでは1825年設立の国立博物館における古代趣味にはじまり、マクシミリアン皇帝の保護主義、ディアス政権下の新アステカ主義と新しいメキシコシティの建設、革命後のインディヘニスマを経て、新しい国立人類学博物館における社会的強者による先住民像の提示に至るまで、欧米諸国なみの近代的発展を目指しつつ、一方で文化的独自性を先住民文明に求める〈文化的自画像〉が一貫して追求されてきたことが分かる。

革命後、インディヘニスマを掲げてこの〈文化的自画像〉を発展させてきたのは、約70年にわたり長期政権を担い続けている制度的革命党(PRI=Partido Revolucionario Institucional)である。だが今日、複雑な内部利害を調整しきれなくなったPRIは弱体化しており、サパティスタのみなら

ず多方面からその国家運営に批判が寄せられている。すでに西暦 2000 年の次期大統領選挙への動きが活発化しつつあるが、PRI の歴史的敗北の可能性も現実味を増している。かりに第 2 勢力の国民行動党 (PAN=Partido de Acción Nacional) が勝利をおさめた場合、クリオリージョ主義に立つ保守政党 PAN のもとでメキシコの〈文化的自画像〉が描き直され、先住民やメスティソ小農民の社会的歴史的位置づけが大きく後退する可能性もある。そこに生じるであろう軋轢とその調整過程には、注視していかなければならない。

最後に、独立後の歴史過程において、メキシコでは啓蒙主義哲学以外の語りが求められたことがなかったという事実には注意しておきたい。問題は、メキシコのような非西洋国家の近代化において、それ以外の選択肢がありえたかという点にある。啓蒙主義の〈外〉に出ることは可能なのだろうか。啓蒙主義に〈外部〉が想定できるとしたら、〈脱啓蒙主義的發展〉とはいったいどのようなものと考えられるのか。本稿は、この巨大な問いへの序論にすぎない。

- 1) 本論は旧稿 (落合 1998) を圧縮し、新たな知見を加えたものである。
- 2) 独立運動が始まる 20 年前の 1790 年、大聖堂近くでアステカ時代の石彫が数点発見された。先住民が礼拝しだすことを恐れ、埋め戻された大きな神像もあったという (Bernal 1979: 77-78)。現在『太陽の石』ないし『アステカ・カレンダー』と呼ばれる直径 3.6 メートルの円盤状の石彫の場合は、1825 年の国立博物館創設後もそこには収められず、大聖堂の左の鐘楼の下に立て掛けられ、野ざらしで 19 世紀の大半をすごした。大聖堂の足元にアステカ文化がつかなぎとめられていたのである。それは、ヨーロッパ文化と先住民文化の力関係の視覚化でもあった。
- 3) ベネディクト・アンダーソンは『想像の共同体』新版 (1997 [1991]) において、19 世紀東南アジアの植民地考古学にみられた熱心な大遺跡の「考古学的復旧作業 [中略] は進歩的人士の圧力をかわすことをも狙った保守的教育プログラムだった」としている (アンダーソン 1997: 295)。だが、おなじ 19 世紀考古学でも、1821 年にすでに独立をとげていたメキシコの場合は事情が異なる。旧宗主国スペインを支持する保守層への政治的攻撃の思想的基盤とすべく、スペインによる侵略から国土を守ろうとした先人としてアステカ皇帝を称賛する〈考古学

的関心〉が、1870年代後半から自由派のあいだでたかまっていたからである(Tenenbaum 1994:140-141)。それは、「公定ナショナリズム」(*ibid.*:139)化し、「自由主義的公定国家史」(*ibid.*:142)に直結していった。

- 4) レフォルマ大通りのモニュメントは、すべて大通り開通後に作られたが、彫刻家マヌエル・トルサ制作のカルロス4世騎馬像だけは、独立前の1796年に旧市街ソカロ大広場中央に設置され、1803年に最終的に落成したものである。この像は、旧宗主国の国王像として独立後に破壊されかけたが、その高い芸術性ゆえに1824年にメキシコ大学中庭で保存されることになり、1852年にホアレス通とブカレリ通の交差点に移設された。そして、1870年代にそこがレフォルマ大通りの出発点になったのである(M. A. Fernández 1990:122-135)。時の経過とともに都市の交通量が増大し通行上の障害物となったこの騎馬像は、1982年に国立美術館前の小広場に移設され、現在にいたっている。このようにカルロス4世像は、植民地末期から20世紀末にいたるメキシコ近代史に翻弄され続けてきた、歴史の証人とも言えるだろう。なお、その跡地はならされて拡張された道路の一部となったが、近くの高層ビルの下には馬をモチーフとした黄色の巨大なパブリック・アートが新たに据えられ、都市の記憶を伝えている。その他の各ロータリーのモニュメントの来歴については、Escobedo, ed. 1992, J. Fernández 1993, Tenenbaum 1994, Tenorio Trillo 1996aを参照されたい。レフォルマ大通りには、ホアレス大統領顕賞碑、改革や対フランス戦に功績あった愛国者の記念碑なども計画されていた(Tenenbaum 1994:135)。しかし、ホアレス碑は1910年にホアレス通に建設され、他は実現しなかった。また、平和と繁栄をもたらした国家英雄としてディアスをたたえる凱旋門の建設も立案されたが、財政逼迫とディアス自身の辞退で実現をみなかった(Tenorio Trillo 1996a:95)。現在、第4ロータリーには高いヤシの木が1本そびえ、第6ロータリーには、ローマ神話の狩猟の女神ディアナの裸像(1946)が中央に立つ水盤型の噴水が置かれている。このふたつのロータリーは、凱旋門などに予定されていたのだろう。

文献表

アルヴァックス、モーリス

1989 『集合的記憶』小関藤一郎・訳、行路社(1950)。

アンダーソン、ベネディクト

1997 『増補 想像の共同体』白石さや・白石隆・共訳、NTT出版(1991)。

落合一泰

1990 「叫びと煙突—記憶のエスノポエティクスにむけて」『へるめす』27:34-

46.

- 1993 『『アメリカ』の発明—ヨーロッパにおけるその視覚イメージをめぐる—』
『ラテンアメリカ研究年報』13:1-40.
- 1996 「先住民文明, 文化間性差, ディスタンス—近代メキシコにおける
文化的自画像の生産と消費」『民族学研究』61:1:52-80.
- 1997 「〈征服〉から〈インターネット戦争〉へ——サパティスタ蜂起の歴史的背
景と現代的意味」岩波講座・文化人類学・第6巻『紛争と運動』137-167
頁, 岩波書店
- 1998 「啓蒙主義の誘惑と拘束—〈理想都市〉メキシコシティの建設」岩波講
座・開発と文化・第4巻『開発と民族問題』207-234 頁, 岩波書店.
- サアグン, コルテス, ヘレス, カルバハル
- 1980 『征服者と新世界』増田義郎・他訳注, 大航海時代叢書第II期12巻, 岩
波書店. 齊藤泰雄
- 1994 「1910年メキシコ国立大学の創設式典」『大学史研究』10:31-45.
- ホブズボウム, エリック, テレンス・レンジャー編
- 1992 『創られた伝統』前川啓治・他訳, 紀伊國屋書店 (1983).
- 吉田光邦・編
- 1985 『図説万国博覧会史 1851-1942』思文閣出版.
- Bataillon, Claude, & Hélène Rivière D'Arc
- 1973 *La Ciudad de México*. SepSetentas 99, México, D. F.: Secretaría de Edu-
cación Pública.
- Bazant, Jan
- 1991 "From Independence to the Liberal Republic, 1821-1867." Leslie Be-
thell, ed., *Mexico since Independence*, pp. 1-49, Cambridge: Cambridge
University Press.
- Bernal, Iganacio
- 1979 *Historia de la Arqueología en México*. México, D. F.: Editorial Porrúa
- Bonfil Batalla, Guillermo
- 1990 *México Profundo: Una Civilización Negada*. México, D. F.: Editorial Gri-
jalbo (1987).
- Chavero, Alfredo
- 1886 *Historia Antigua y de la Conquista*, Tomo I de *México a través de los Si-
glos*, ed. por Vicente Riva Palacio, México y Barcelona: Ballescáy
Cía, Editores.

Escobedo, Helen, ed.

- 1992 *Monumentos Mexicanos : De la Estatua de Sal y de Piedra*. México, D. F.: Editorial Grijalbo (1989).

Feest, Christian

- 1985 "Mexico and South America in the European *Wunderkammer*." Oliver Impey & Arthur MacGregor, eds, *The Origins of Museums : the Cabinet of Curiosities in the Seventeenth Century Europe*, pp. 237-244, Oxford : Clarendon Press.

Fernández, Justino

- 1993 *Arte Moderno y Contemporáneo de México*. México, D. F. : Universidad Nacional Autónoma de México (1952).

Fernández, Miguel Angel

- 1987 *Historia de los Museos de México*. México, D. F. : Promotora de Comercialización Directa.
1990 *El Marco del Encuentro*. México, D. F. : Smurfit Cartón y Papel de México, S. A. de C. V.

García Canclini, Néstor

- 1989 *Culturas Híbridas : Estrategías para Entrar y Salir de la Modernidad*. México, D. F. : Editorial Grijalbo, S. A. de C. V.

Keen, Benjamin

- 1990 *The Aztec Image in Western Thought*. New Brunswick : Rutgers University Press (1971).

Meyer, Michael C., & William L. Sherman

- 1995 *The Course of Mexican History (Fifth Edition)*. New York & Oxford : Oxford University Press.

Morales-Moreno, Luis Gerardo

- 1994 "History and Patriotism in National Museum of Mexico." Flora E. S. Kaplan, ed., *Museums and the Making of "Ourselves" : The Role of Objects in National Identity*, pp. 171-191, London & New York : Leicester University Press.

Ramírez, Fausto

- 1985 *La Plástica del Siglo de la Independencia*. México, D. F. : Fondo Editorial de la Plástica Mexicana.
1988 "Dioses, Héroes y Reyes Mexicanos en Paris, 1889." *Historia, Leyen-*

- das, y Mitos de México : Su Expresión en el Arte*, pp. 201-258, México, D. F. : Universidad Nacional Autónoma de México.
- n. d. "Patria, Familia, y Religión : Las Imágenes de los Conservadores a Medios del Siglo XIX." Folleto para la Sala 5 del Museo Nacional de Arte, México, D. F. : Museo Nacional de Arte.
- Schávelzon, Daniel
- 1988 *La Polémica del Arte Nacional en México, 1850-1910*. México, D. F. : Fondo de Cultura Económica.
- 1994 "La Arqueología del Imperialismo : La Invasión Francesa a México." *Mesoamérica* 28 : 321-335.
- Shelton, Anthony Alan
- 1995 "Dispossessed Histories : Mexican Museums and the Institutionalization of the Past." *Cultural Dynamics* 7 : 69-100.
- Siller, Juan Antonio
- 1987 "La Presencia Prehispánica en la Arquitectura Neo-Maya de la Península de Yucatán." *Cuadernos de Arquitectura Mesoamericana* 9 : 51-68.
- Tenenbaum, Barbara A.
- 1994 "Streetwise History : The Paseo de la Reforma and the Porfirian State, 1876-1910." William H. Beezley, Cheryl English Martin, & William E. French, eds., *Rituals of Rule, Rituals of Resistance : Public Celebrations and Popular Culture in Mexico*, pp. 127-150, Scholarly Resources Inc., Wilmington, Delaware.
- Tenorio Trillo, Mauricio
- 1996a "1910 Mexico City : Space and Nation in the City of the Centenario." *Journal of Latin American Studies* 28 : 1 : 75-104.
- 1996b *Mexico at the World's Fairs : Crafting a Modern Nation*. Berkeley & Los Angeles : University of California Press.
- Tovar de Teresa, Guillermo
- 1992 *La Ciudad de los Palacios : Crónica de un Patrimonio Perdido*. 2 tomos. México, D. F. : Fundación Cultural Televisa, A. C.